

川とまちのことを改めて考える

代表理事 塚原 浩一

水辺にうるおいとにぎわいを、というのは環境目的を追加した平成9年の河川法改正前からずっと言われてきた。かわまちづくりの制度ができてからも随分と経って、観光・レジャー目的で成功しているもの、地域の大切な利用空間になっているものなど、様々なかわまちが全国に広がっているのは素晴らしいことだと思う。でも、今やそれだけではもったいない。流域総合水管理の時代、河川・流域環境に具体的・定量的な目標を持つという時代に、改めてかわまちの在り方を問い直しても良いのではないか。

川や水辺への想いや価値観は人それぞれで多種多様。川の側からそれにどう応えていくのか、「流域治水、流域環境、水利用→流域総合水管理」を目指そうというなかで、川とまちの関係性がどうあるべきか多様な視点から総合的に見直す必要があると思う。

かわまちづくりという制度のなかで観光や地域の空間利用として成功している例ももちろんあると思うが、どうもそこにフォーカスし過ぎている面があるのかもしれない。川とまちとの関係性は、そうした整備したスポットなどだけの「賑わいづくり」ということではなく、地域全体、流域全体としての視点で考えていきたい。

そもそも昔のかわまちは、気持ちが良いからとか楽しいからとかではなく、暮らし、生産、物流、あるいは地政学的な必要があって生まれたものだと思う。結果、そこを中心にヒトが集まって治水・防災も含めた川と水辺の文化が生まれて継承されてきた。流域社会全体としての水の恵み、水の脅威、それに対する人々の営みと川への働きかけ、それらの関わりが集約され体現された場所だったと思う。そうした伝統的なかわまちな文化は途切れたように見えていても、川が育んできた伝統文化、産業、生活様式、自然観、防災の知恵などは、お祭りやパワースポット、都市や自然の景観、伝統工芸など様々な形で地域に今も根強く残っている。観光、レクリエーション、リラクゼーションといった現代的な価値のなかにも昔からの伝統や物語が息づいているのではないか。

古くからの伝統文化と現代的な価値観が融合し、新たな地域としての個性、住民意識を形づくり、地域としてのシビックプライドにつながっていく、そういうものの中心にかわまちがあって欲しいと思う。物販、飲食などがクローズアップされがちだが、それだけではなくむしろ水を賢く使う知恵、

水の脅威をいなくす知恵、水と川の自然と生物をリスペクトする心、水辺をまちづくりに活かす知恵などの伝統的なものを引き継ぎつつ、新しい価値観も取り込み、川と流域の自然資本や流域特性を活かしたあらゆる取り組みの中心になっていくことが求められても良いと思う。

その意味で、かわまちは単に水辺を整備するだけのものではなく、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を体現する「場」であり、ヒトのつながりや社会的なネットワーク、ひいては流域治水、流域環境、地域づくりを融合した様々な取り組みのためのソフトパワーを育む「場」になっていくことを欲しい。

治水にせよ環境にせよ、流域で物事を考えるには、コンセプトだけではなくなかなか伝わらない。シンボルや情報発信の拠点があった方が良い。そこからさらに具体的な流域管理の取り組み・協働が生まれてくる。水の脅威や水の恵み、川を通じた流域としてのつながりや地域のアイデンティティが実感できる「場」づくりが重要だと思う。川にヒトが向き合ってもらうことが、治水としても環境としても利活用としてもなにより大切であり、そのゲートウェイがかわまちであって欲しい。

いま、河川管理者による定量的・具体的な河川環境の目標づくりが始まっている。でも、自然環境だけ見ていけば良い訳ではなく、環境目標をつくるのにしても実現していくにしても、防災やまちづくり・水利用などと切り離すことはできない。治水・防災、水利用、エネルギー、生活、産業、伝統文化などあらゆるものを内部化して総合的にみて取り組む必要がある。

環境目標は自然環境にとどまらず、まちやヒトとの関わりなかで川と水辺をどうしていくのか、逆に川と水辺の在り様が流域管理に関わるまちやヒトの活動・ネットワーク、社会関係資本の充実はどう貢献していけるのか、そうしたかわまちなソフトな環境目標が開発できないものかと思う。

河川の物理環境の定量目標と同列ではないかもしれないが、川とまち・ヒト・地域の関係性をどうしていくのか、流域総合の治水・環境・利用のニーズとの関係性のなかで川と水辺が何を指すのか、多様な価値観にどう応えるのか。もちろんそれは河川だけの目標ではなく、必然的に地域社会・流域社会全体としての目標になる。そういう社会の共有意識ができてくると良いと思う。